

企業訪問 循環型最前線レポート

(株)エムエムアイ

砕石資源循環業で 新しい事業展開を

(株)エムエムアイ



代表取締役／彦坂 孝明

■所在地／豊橋市前田町1-2-1 ■創業／平成2年 ■資本金／4.800万円 ■従業員／8名 ■事業所／賀茂プラント
■取得許可／産業廃棄物収集運搬：愛知県・豊橋市（がれき類）
産業廃棄物中間処理（破碎）：豊橋市（ガラスくず、コンクリートくず及び陶磁器くず・がれき類）

協業化に挑む。鉱物資源から都市資源へ

砕石業は従来、山を削り岩を掘り出し、粉碎して道路建設やビル建設の生コンや宅地の造成などさまざまな土木建設工事に欠かせない資材としていまでも大量に使われています。特に公共工事に伴う需要は大きなものがあります。しかし、最近では山を削ることによる環境負荷やビルの解体、道路補修等により大量のコンクリートがら、アスファルトがらの廃棄物が発生し、再資源化、リサイクル化が急速に進み、砕石業の在り方は大きく変わりました。(株)エムエムアイ(彦坂孝明社長)は、そうした現状を打破すべき、砕石資源を山から都市に求め、リサイクルを主体にした砕石資源循環業へ、地元の建設会社が手を組み、いち早く事業展開を図り、協業化を実現しました。



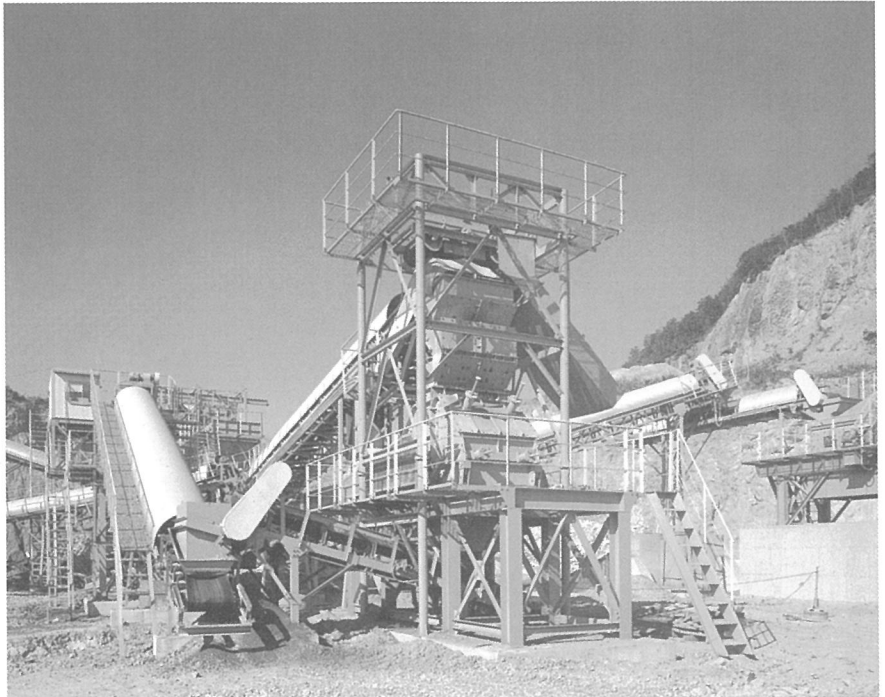
彦坂氏は(株)エムエムアイの代表であるとともに、照山砕石(株)のオーナーでもあり、砕石業一筋に取り組んできた砕石のプロです。(株)エムエムアイは平成2年10月に、照山砕石(株)を中心に関係が深かった地元の建設業者((株)中部、藤城建設(株)、朝日土木興業(株)、成和重建(株))5社が共同出資で設立した会社です。

設立に至る背景について彦坂社長はこういいます。「ビルや建物の解体で大量の廃コンクリート、道路や舗道の工事で大量の廃アスファルトが発生します。これらの建設廃棄物はほとんど埋立処分されていましたが最終処分場は逼迫し、新規の処分場建設も不可能な状態で、これまでのやり方では限界が見えてきました。これからは建設廃棄物をリサイクルする時代だと痛感しました。

そんな時、地元で有力企業の中部ガスグループの一社に浜松地区で再生土を扱う会社があり、グループの(株)中部が豊橋地域で建設廃材のコンクリートがら、アスファルトがらのリサイクル事業を検討していると聞き、渡りに船といったタイミングで共同事業化に拍車がかかりました。また、豊橋地区の23号線のバイパス計画もあり、骨材のほとんどを東三河地域で調達することが決まっていたから見通しは幸運でした。

平成4年10月にはリサイクル法が改正され、これも追い風になり、新たに1社((株)波多野組)が参画、現在の6社協業の体制が整いました。

同社の現在のリサイクルフローは、東三河地域で発生した工事や解体時の廃材を収集し、破碎プラント(クラッシャー)で粉砕し、40~0mmの再生路盤材、20mm以下の再生骨材のリサイクル製品を生産。生産したリサイクル製品は、グループ会社はもとより東三河全域の各取り引き先へ常時安定供給を図っています。第二東名高速道路の建設工事にも供給しています。

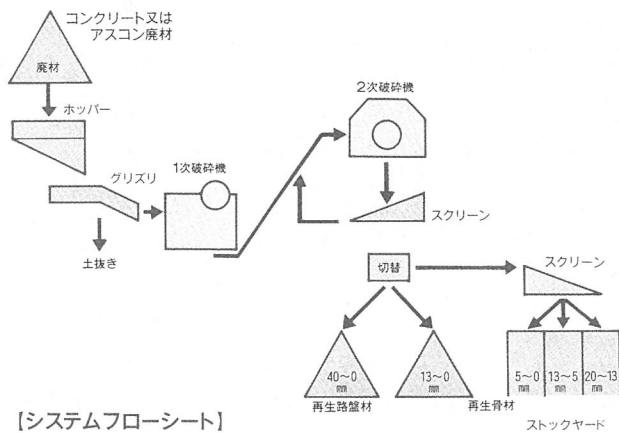


再生骨材



再生路盤材

プラントの規模は、敷地面積4000m²、処理能力は100トン/時、1日800トン、年間で22万トンが可能です。同社では現在年間で18万トン进行处理し、年間売上高は3億円です。同社はこの他、コンクリートがら、アスファルトがらに瓦を10%混ぜた新しいリサイクル材を開発し、平成14年に愛知県の“あいくる材”の認定を受け、この分野の市場開拓にも力を入れています。さらに、今後の課題としてコンクリートがらのリサイクル製品を生コン用碎石として使えるよう品質の向上と合わせてJIS規格の整備に向けて関係方面へ働きかけをしています。



公共事業の活性化が資源循環を進める

エムエムアイの経営にあたっては3ヵ月に1回グループ会社の幹部が集まり、運営会議を開いて、事業計画、目標について話し合い、経営の活性化を図っています。

今後の市場動向について彦坂社長は「多くのビルや建物が老朽化を迎え、大量のコンクリート、アスファルト廃材が発生します。こうした都市資源を公共事業を通して循環させることが不法投棄をなくし、環境を保全し、地域の社会整備を充実させていくことにつながります。」と公共事業の重要性を力説しました。